

しんぽう文芸

歌壇

長瀬和美選

◎踏みかえる足の重たき田草取り黙々とひとりむむは尊 富士吉田 村山 文
◎根固めの梅雨の晴れ間の青田千し蔓延る草の藻の匂いせり 同

俳壇

山田省吾選

◎花合歡を天蓋として富士見坂 甲府 伊藤 隆雄
【評】天蓋は、本堂の内陣の天井から挿頭す、笠状の装飾
方形、八角形、円形などある。富士見坂を登って行くと
富士山が見える。そこには大きな一本の合歡の木がある。
広がった枝に花は真つ盛りで、まさに天蓋のようだ。

柳壇

坂田よし江選

◎欲張りが「一石二鳥座」とし 富士吉田 田辺 義樹
【評】「鬼を追う者は一鬼をも得ず」という諺もあつた。欲
張り手程度がいいですね。
◎一刻に「プロファミンタ」いい時代 北杜 五味 今天
【評】何事も無く終わった一日へ感謝し、明日も良い日である
よう、祈る気持ちが伝わってきます。

◎決定ボタンつくも押し日々過ぎ最後のボタン押すのは誰か 富士吉田 中村 史
◎覚め際の夢の記憶の断片を闇に置き去り身を起したり
◎同窓会に会いて二ヶ月居きたるメールは笑顔の幹事の訃報
遥かなる異国に果てし姉の夢が今は今日に月命日
立ち寄りし園芸店に苗を貰う探しあ、ねしパッションフルーツ
俯ぎて咲けるあえかな海棠の花にもふた心あるやもしれぬ
意識なくた眠りいる病む人にマロニエの蕾ふくらみゆけり
限界と思ひおろしかこの頃は頼りにされぬ孫の数学
天平の少年阿修羅極ましく美しき面輪にこころ癒さるる
【評】二首とも、地味な作品ではあるが、言葉の端々に神経がゆき届いていて気持ちのよい
作品。殊に一首目の「踏みかえる足の重たき」は、表現が的確で、田んぼで草取りをする
人の姿が実感される。いずれも下句が見所だろう。日常の細々とした出来事や景色の
中にも、こんなふうに味わいのある広い世界が横たわっているのだから。

◎八海の米揚ぐ水車音涼し
暮れ迫る池畔かしまし行々子
湧水に梅花藻揺る涼気かな
郭公の二た三声して山匂ふ
弥陀陀原我を誘ふ吾亦紅
独り居の屋敷にすする冷茶麴
田水張る送電塔の長き影
大月 湯沢 正典
紫陽花の葉ごころ準ふ雨の色
甲府 中沢マサ子
祭の終る夜空に星の満ちてをり
甲府 松田 健備
短夜や思ひふくらむ同朋会
甲府 村松 幸治
草の戸に日かな風たつ半夏生
甲府 鈴木まさお
句碑の建つ寺を尋める濃紫陽花
中央 佐野 久則
甲府 中探す親子の里の山
甲府 今村 楢枝
愛らしき水着姿の三歳児
甲府 桑原 博子
雨上がり色紙散らばる星祭
市川三郷 立川 亮子
若き日のキャンプ唄びし月見草
中央 一瀬 和子
紅のスポーツカーや夏木立
富士吉田 田辺 義樹

◎雨蛙時に輪唱聞かせてよ 中央 鈴木 節子
【評】田も畑も乾き雨を欲しと願う気持ち。雨蛙にまで
頼りたい切ない気持ちを川柳らしく表現しています。
飽食を一杯詰めた「ゴミ袋
盗んでも許されるのは芸である
膝底に石段登る日の辛さ
腹一杯が口へ吐き出された夫
最高のゴルフ人生感謝
プレゼント愛と真心包みこみ
子期しない風が予定を狂わせる
二人連れ素直に伸びる万歩計
友達の幅が広がる趣味の会
年寄りの戯事が聞いてくれ
新聞を見てるわたしは平和です
師を囲み踊り歌った武田節
餃子だけ包いらいぬ料理増え
無為な日々明日は明日はと古希となり
柳友と語れば世間広くなり
畑仕事時時鉛筆×千用紙
市川三郷 望月 声川
甲府 小林信郎
甲府 小尾 康弘
甲府 大村 麻子
甲府 石井 章
市川三郷 遠藤まどり
山梨 松下 時子
甲府 鶴田 甲敬
甲府 田口 節子
山梨 鮫田 律子
甲府 宮川ともお
山梨 河野 茂
甲府 内藤 勝人
甲府 小林 衛
甲府 斎藤 繁一
市川三郷 前嶋 清栄

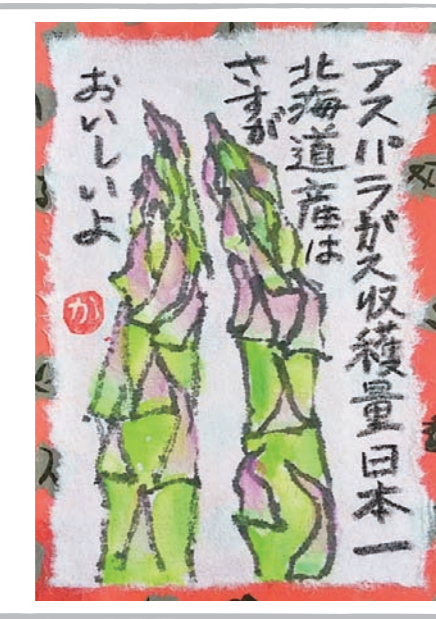
昇仙峡今昔

坂田よし江



女神森から先は徒歩で
す。左右の道端に可憐な花
をつける雑草を愛でつ、
次々に広がる深谷美、特に
人面石、ラクタ石、石門、
天を突き破る滝、自然が織
りなす芸術に感動を覚ま
ました。
途中、河原下りて清流
で手を洗い、持参の弁当を
広げました。お弁当を売
ってない時代をそれぞれ
手作りの昼食です。
私は母が作ってくれた小
麦饅頭でした。重曹であっ
くら膨らんだ薄黄色の皮に
さつまいもの餡、砂糖など入
ってないのに甘くおい
愛しい思い出です。
帰りに記念におみやぎ
を引こうと行って、そばに
いた巫女さんに「おいくら
ですか」と尋ねると「お気
持で結構です」との事。
素直に受けて引き、良いの
悪いの言いながら神社を
あとにしました。
後で気付いたのですが
「気持ち結構」という事
は気持ちよければお金は
要らないという事ではな
く、十円でも二十円でも良
いという事だったので、
引き返すことも出来ず、
空気が読めなかった若者に
後悔の悪い気持ちで帰路に
ついた事が思い出されま
す。

二十二年十月、学生時代
のグループで会合計画を立て
て昇仙峡へ行く事にしまし
た。着る物も食べる物も貧
しい時代でしたが、心は明
るく弾んでいました。
その頃でも女神森までバ
スがあり、バスもあまりの
乗る機会が無かった私は遠
くへ旅に出るよき喜びで
せん。



松手紙 通信
甲府 長谷川 一枝
(山下ひろみ 選)

は徐行し眺めましたが、当
時の感動もなく、立ち止ま
った土産店では外国人の観
光バスが四台も止まってお
れ自然の美しさが失われる
昇仙峡に寂しさを感しまし
た。 (本紙柳壇選者)

追風に颯々一強 吹きとほす
恐るべし異論軽視の多数決
へボ将棋 改悪の駒よせ切れず
サミットの握手の笑みの真を讀み
スマホなどながら運転 事故多発 甲斐 石井章
一句、都議選、二句、世論無視、三句、何事も奇
せがすべて、四句、駆け引き、五句、道交違反、
選者吟 ケリラ雨 猛賢、さうも荒れている

短歌、俳句、川柳、時事
川柳ともはがきに5首
5句以内、未発表作品に
限ります。二重投稿はご
遠慮下さい。作品は小紙
ホームページにも掲載し
ます。はがきには「しん
ぽう歌壇俳壇・柳壇」
時事川柳とそれぞれ朱
書きし、氏名・住所・電
話番号を明記して下さい
信太郎の各先生まで。

川柳「甲斐野」各地句
「降りる駅目の前にして夢
の中山梨・まさお、融通
のきかぬ頑固な金庫番」三
升会・はじむ、二人の娘来
るたび親は涙ぐみ春日居
半、花の中戦国絵巻平和な
り」なでして環など、30%。
「川柳」表紙句は「や
せてえ孫だが抱くともも
ちい武井きみ子。方言に

「將軍、大名家臣(二事典)
今川徳三は百歳近く、掌中
小説「赤い靴」の三谷静子
も90歳を超えた。それに昨
年になつた武蔵野子が92
歳、「あやふや自分誌」等并
も齢を意識出来るするまし
て八十路の己れの姿は「大
澤久美子」など、42%。
「俳句」郭公「秀句集」
から「忽然と死のあり若葉
の花」いさ子、その赤松を

「文学の歴史」
総合誌「文学と歴史」
「山梨の歴史」
「山梨の歴史」
「山梨の歴史」

「甲斐野」
「文学の歴史」
「山梨の歴史」

「山梨の歴史」
「山梨の歴史」
「山梨の歴史」

「山梨の歴史」
「山梨の歴史」
「山梨の歴史」

「山梨の歴史」
「山梨の歴史」
「山梨の歴史」

「山梨の歴史」
「山梨の歴史」
「山梨の歴史」

有名作家の黎明期にスポット
「作家のデビュー展」 8月27日まで 県立文学館
タリ化され、それぞれが執筆
した作品を冠する特殊能力を
使って戦うアクション漫画(原
作朝霧カフカ、作画春河35)
同作品には笛吹市出身で小説家
の辻村深月さんも登場する。会
場には同展のために描き下ろし
たオリジナルイラストやパネル
が展示されているほか、観覧料
100円、高校生以下、65歳以上
を払ってクイズに答えると、登
場キャラクターの缶バッジが1
個プレゼント(数量限定)され
る。
観覧料は300円、大学生2
100円、高校生以下、65歳以上
は無料。申し込み問い合わせ
同館055(2)550808